

# ホラーの愉悦と 恐怖の構造

養老孟司

(解剖学者)

原書を読み込むほどのキング・フリークで  
知られる解剖学者・養老孟司が、  
交感能力を備えた人間だけが抱くことのできる  
「恐怖」を多面的に分析する。

## キングは「現代人の恐怖」を描く

キングであっても『ペット・セマタリー』のペットの共同墓地とか、『シャイニング』のホテルなど、恐怖を増幅させる舞台設定は使われています。でも、恐怖の源泉は舞台ではない。『ペット・セマタリー』の「セマタリー」は、本来は「Cemetery (セメタリー・墓地)」です。でもなぜか、「Sematary」と誤ったスペルがタイトルになっています。

これはペットを失った子どもたちが、自分たちで作った共同墓地の、その入り口に掛けられたアーチにペンキで書かれた「Pet Sematary」がそのままタイトルになっているからです。愛するものとの理不尽な別れを受け入れられず、再会を信じて造成されていた拙い墓地には、純粹で強い思いが込められています。ある出来事を契機にそれがすべて恐怖に反転していくことになります。

……そこには砂岩の表面にふぞろいな字で彫りつけられた、この世に生まれた最高の犬ハンナ——一九二九〜一九三九」という銘が見える。砂岩は比較的やわらかいとはいえ——ために碑文はほとんどぼやけてしまっ

ているが——それでも、子供がこれだけの文字をのみで彫りつけるのに、いったいどれだけの時間を費やしたか想像もつかない。その行為にこめられた愛情と悲しみの深さを思うと、肅然として襟を正したくなる。これほどのことは、この子たちの親でもやるまい——彼らが老親を失ったとき、もしくは幼くして子供を亡くしたときでさえ。(深町真理子訳『ペット・セマタリー』上巻、文春文庫より)※括弧不揃い原文ママ

この部分だけで、この後の物語がかなり示唆されている上に、「どれだけの時間を費やしたか想像もつかない」「この子たちの親でもやるまい」といった子ども達の純粋な気持ちの強さのすべてが、とんとん恐怖に裏返っていく、この筆力がキングの真髓といえます。

この作品は、キングの自宅が大型トラックの行き交う道路沿いにあり、娘が飼っていた猫がトラックに轢かれて死んだこと、家の裏手にペットの共同墓地があったことなど、作家の体験が題材になっているようですが、そもそもアメリカの日常は日本などと比べればはるかに暴力と背中合わせです。銃が原因で死んだ七〇〇〇人の子どもたちを哀悼して、七〇〇〇足の靴が連邦議会議事堂前に並べられたこともありま

したが、キングの作品にはそんなアメリカ社会の、そしてすべての現代社会を生きる人の不安が張り付いています。

また、キングは執筆中に、自分でも怖くなつて、座っている椅子から動けなくなることがあるそうですが、それほどまでにストーリーテリングに長けています。それは一九世紀のチャールズ・ディケンズなどにも見られる、アングロサクソンの作家の特徴かもしれません。つまり、彼らの世界を捉える方法が、構造化された物語にすることだからなのだと思います。

たとえば、ゾウムシは細かく分類していけば、どんだん枝分かれしていくことになりませんが、その違いをストーリーにできていくわけがありません。でもその違いは、標本を見れば一発でわかります。だから「事実」は言葉では伝わらない。原理的には見てもらうしかならないです。

一方、たとえば歴史を語ろうとする時、つまり時間を扱う時の唯一の形式は、物語です。ストーリーに仕立てなければ、退屈で誰も聞いてくれません。だから、歴史を語るのが好きな社会からは優れたストーリーテラーが生まれます。

とはいえもう一方では、ジェイムズ・ジョイスやジェーン・オースティンのように物語よりも描写を重んじ、意識の流れを描くことに傾斜



箱根の別宅にて。撮影=幸田 森

する純文学の系譜があつて、そこではディケンズやキングのようなストーリーテラーが軽んじられたりしますが、私は純文学については素人だからストーリーに夢中になれるほうが圧倒的に楽しいのです。

そして、長ければ長いほどいい。短編だと、せっかくな登場人物を覚えたところで終わってしまいます。キングには『タリスマン』など、現実世界と異世界が小さな裂け目につながるようなファンタジー作品もありますが、読む側も苦勞して頭の中に異世界を作っているわけで、すぐに終わってまた別の世界を作られるのは、面倒くさいのです。

その点、よくできたファンタジーは、長編になつても世界が破綻しません。いつまでも想像力で世界を拡張することができます。

## 想像力が恐怖を増幅させる

想像力で世界を作る時には、映像はむしろ邪魔になることも少なくありません。初めて映画化されたキング原作の作品は『キャリアー』(一九七六年 以下、アメリカ公開年)ですが、私は見ていません。面白かったのは『シャイニング』(八〇年)と『スタンド・バイ・ミー』